

先週私たちは、ユダヤの指導者たちに捕らえられた使徒たちが、彼らにむちで打たれ、「主の名によって語ってはならない」と言い渡された上で釈放されたことを見ました。驚いたことに、釈放された使徒たちは、喜びながら、議会后にしたというのです。そして、その喜びの理由は、彼らをして、御名のためにはずかしめられるに値する者とされたということでした。つまり、彼らは主イエスとそのすばらしさを知ることのゆえに、主のために苦しみを受けることさえも喜んで耐え忍んだのです。

ここに福音の力、主イエスがキリスト（神の救い主）であること力の強さがあります。使徒たちは、みことばと聖霊によって、その力を体験していましたので、たとえ指導者たちに「その名によって語るな」と命じられ、また、むちで打たれるようなことがあっても、それを止めることができませんでした。いや、語り続けずにはおられなかった。それほど主イエスがすばらしいお方であり、この世の何ものにも優ることを知っていたからです。そのようにして、主の弟子はいよいよふえていきました。

ところが、そこにある問題が持ち上がるのです。ギリシャ語を使うユダヤ人たちが、ヘブル語を使うユダヤ人たちに対して苦情を申し立てたとあります。1節「そのころ、弟子たちがふえるにつれて、ギリシャ語を使うユダヤ人たちが、ヘブル語を使うユダヤ人たちに対して苦情を申し立てた。彼らのうちのやもめたちが、毎日の配給でなおざりにされていたからである」。

「弟子たちがふえるにつれ」とありますが、この時の弟子の数はどのくらいであったと思いますか？最後にその数字が出てきたのは4章4節です。そこには男だけで5千人とありました。その後にも、人数は増え続けていますので、最低でも5千人はいたということができるとでしょう。女性や子ども達も加えると、かなり大きな数になります。実際のところはわかりませんが、当然、その中には、やもめの人たちがいたことでしょう。

ここではギリシャ語とヘブル語という言葉の違いが、苦情が出た背景にあったこととして記されていますが、私たちが知るように、言葉の違いというのは、決して小さな問題ではありません。というのも、その背後には文化的な違い、つまり、考えの違いなども関係してくるからです。そうすると、ここに持ち上がった問題は、やもめたちへの毎日の配給についてですが、ギリシャ語とヘブル語を使う人々の間に何らかの隔たりがあった可能性も大いにあります。それゆえに、教会は分裂の危機にさらされたと言っても過言ではないでしょう。

そこで使徒たちは、この苦情に対応するわけですが、そのことが2-4節に記されています。「そこで、十二使徒は弟子たち全員を呼び集めてこう言った。『私たちが神のことばをあと回しにして、食卓のことに仕えるのはよくありません。3 そこで、兄弟たち。あなたがたの中から、御霊と知恵とに満ちた、評判の良い人たち七人を選びなさい。私たちはその人たちをこの仕事に当たらせることにします。4 そして、私たちは、もっぱら祈りとみことばの奉仕に励むことにします。』」。

使徒たちは、弟子たち全員を集めました。この「全員を集めた」というところに、彼らがこの問題を大事なこととして捉えていたことがわかります。彼らは、ここで弟子たちの中から、このことのために奉仕する人たち7人を選ぶようにと提案するのですが、なぜ彼らはこの苦情に対して、その真偽をまず調べることをしなかったのでしょうか？私が使徒であったなら、誰がそんな差別的なことをしたのかと、その犯人を捜すことに躍起になっていたかもしれません。

皆さんはどう思われますか？なぜ使徒たちは、その問題を追及することをせずに、すぐにこのことのための奉仕者を選ぶことを提案したのでしょうか？おそらく、その答えは、彼ら自身、この問題の責任が自分たちにあることを知っていたからではなかったのでしょうか？というのも、この時に初めて、使徒たち以外の奉仕者（リーダー）が選ばれたということは、それ以前はいなかったということです。ですから、仮に使徒たちが、自分たちの手で毎日の配給をしていなかったとしても、そこから出た問題は、自分たちの責任であると彼らは理解していたと思うのです。

でも、現実としては弟子たちの増加に伴い、もはや彼らだけでは、教会の歩みを導くことはできなくなっていました。使徒たちだけですべてをするには限界に達していたのです。そこで彼らは、神様から与えられた召しとしてのみことばの奉仕に専念することを選びます。そして、食卓のことやその他の奉仕に携わる人々を選び、任命するという結論へとたどり着くのです。

ここで注意していただきたいのは、使徒たちをして、彼らは食卓の奉仕を軽く考えたのではないということです。彼らは、やもめ達のケアを二の次だと言っているわけではありません。なぜそう言えるのでしょうか？それは、その働きに携わる人を選ぶ際に、彼らがその条件とした「御霊と知恵とに満ちた、評判の良い人たち」から、その理由を見ることが出来ます。

御霊と知恵とに満ちた人は、霊的なことに仕え、そうでない人は、物質的なこと、日常的なことに関わるのではありません。そのどちらも、いや、すべてのことが霊的なことであり、主の前に尊い働きであるゆえに、彼らはこの奉仕をする人として、御霊と知恵とに満ちた、また人々からそれを認められるような人々を選ぶように告げました。そして、その提案にどう会衆が応答したかが、5節以降に記されています。

5-6節「この提案は全員の承認するところとなり、彼らは、信仰と聖霊とに満ちた人ステパノ、およびピリポ、プロコロ、ニカノル、テモン、パルメナ、アンテオケの改宗者ニコラオを選び、6 この人たちを使徒たちの前に立たせた。そこで使徒たちは祈って、手を彼らの上に置いた」。

使徒たちの提案を、弟子の全員が承認することで、この7人の人たちが選ばれ、任命されます。使徒たちが祈って、彼らの上に手を置いたということは、そういうことです。ちなみに、この人々の名前が、みなギリシヤ的なものであることから、それは苦情を出したギリシヤ語を話すユダヤ人に対応するためであったと考えられています。いずれにしても、この7人が御霊と知恵とに満ちた人として、この奉仕のために選ばれるのです。

でも、どうぞ使徒たちの提案したことと弟子たちが選んだ人とのその内容の違いに目を留めて下さい。使徒たちは「御霊と知恵とに満ちた」人たちを選ぶように言いましたが、人々が選んだのは「信仰と聖霊とに満ちた人」たちです。御霊と聖霊は同じですから、あとの違いとしては、知恵と信仰となります。知恵と信仰とは同じではありません。知恵は知恵であり、信仰は信仰です。

では、弟子たちは使徒たちの言うことを自分たちで勝手に変えてしまったのでしょうか？それとも、この手紙の著者ルカが書き間違えたのでしょうか？詩 111:10 「【主】を恐れることは、知恵の初め。これを行う人はみな、良い明察(めいさつ)を得る。主の誉れは永遠に堅く立つ」。また、ヤコ 1:5 には「あなたがたの中に知恵の欠けた人がいるなら、その人は、だれにでも惜しげなく、とがめることなくお与えになる神に願いなさい。そうすればきっと与えられます」と記されています。

「主を恐れることは、知恵の初め」であり、「主に願うなら、知恵は与えられる」と聖書はいいます。主を恐れることとは、主を信じることがなければ成り立ちませんから、それは主への信仰と言えるでしょう。つまり、信仰と知恵とは、決して切り離すことのできないものです。ですから、御霊と知恵に満ちた人とは、どんな人かという時、それは信仰と聖霊とに満ちた人といえます。なぜなら、御霊(聖霊)は、どんな人に与えられますか？どのような人が、聖霊に満たされるのでしょうか？それは信仰の人です。

ペテロはこう語りました。**使 2:38** 「悔い改めなさい。そして、それぞれ罪を赦していただくために、イエス・キリストの名によってバプテスマを受けなさい。そうすれば、賜物として聖霊を受けるでしょう」。聖霊は、主への信仰に生きる人に与えられ、その人のうちに満ちて下さいます。そして、聖霊に満たされるなら、その人のうちには神の知恵も満ちるのです。

ですから、この時教会は、御霊と知恵とに満ちた人であると共に、信仰と聖霊とに満ちた人としてのステパノ、ピリポ、プロコロ、ニカノル、テモン、パルメナ、アンテオケの改宗者ニコラオを選ぶことで、彼らを通して、この問題は解決を見たようです。それはどこか曖昧な表現にも聞こえるかも知れません。なぜなら、解決したとは記されていないからです。でも、その代わりに、もっと積極的なことばがこの後に続きます。

7節「こうして神のことばは、ますます広まって行き、エルサレムで、弟子の数が非常にふえて行った。そして、多くの祭司たちが次々に信仰に入った」。「こうしてやもめたちの配給の問題は解決した」ではなく、こうして神のことばは、ますます広まってきました。そして、エルサレムで、弟子の数が非常にふえて行ったのです。もしこの時、問題が解決されず、ギリシャ語を話す人たちと、ヘブル語を話すユダヤ人との間に分裂が起こっていたなら、神のことばが広がることはなく、弟子の数もふえることはなかったでしょう。

でも、使徒たちをして、彼らが祈りとみことばの奉仕に励み、また御霊と知恵、信仰と聖霊とに満ちた7人のリーダーたちが食卓をはじめ、その他、弟子たちの毎日に関わることに仕えた時、神様のことばは、ことばとわざ、弟子たちの毎日の歩みを通して、ますます広まって行ったのです。そして、それを通して多くの祭司たちが次々に信仰に入りました。このことを聞いてあなたは驚きませんか？大きな励ましを受けませんか？

というのは、これまでの流れからすると、祭司たちは、弟子たちと彼らの語っていた主イエスに反対する者、敵対する者たちでした。そんな彼らが、理由が何であれ、信仰に入ったというのですから、かなり大きなリスクが伴ったはずですが、彼らもまた大祭司やサドカイ派の人々といったユダヤの指導者たちから迫害を受けるようになってもおかしくありません。それでも、多くの祭司たちが信仰に入ったのです。生きて働かれるキリストの証を、使徒たちのみことばの奉仕や弟子たちの毎日の歩みを通して見たからではないでしょうか。

御霊と知恵とに満ちた人、信仰と聖霊とに満ちた人と聞くと、「自分はリーダーではないから、関係ない」と考える人もおられるかも知れません。でも、実は、それは主のすべての弟子たちが求めることです。なぜなら、信仰に満ちるとは、主イエスを信頼しきった状態です。そのような人は、喜んで主のみことばに聴き従うでしょう。御霊に満ちるなら、御霊が主に従うための力を与えて下さいます。そのような人は、主の知恵によって、いつでも、どのような時にも、キリストをあがめ、キリストの証人となるのです。

皆さん、主イエスは、私たちがみなそのような者となるために、ひとりひとり、その名を呼んで召し出して下さいました。主はあなたのためにあの十字架の苦しみを、その死をも耐え忍んで下さったのです。その向こうに私たちの救いを見て、主がそれを喜びとして下さったからです。そして、その喜びとは、私たちがこの方への信仰と聖霊と知恵とに満ちた者となり、この救いを心から喜び、天国の希望に満ちることで、今の世にあっても進んで主を証する者となるというものです。

そのように主が私たちに対して信仰をもって下さるので、私たちは「自分はこんな者です」といって、自分の成長を留めてはいけません。「私は変わらない」と言うてはいけません。なぜなら、主の御心は、ご自分につくすべての人を、信仰と聖霊と知恵とで満たすことで、その存在のすべてを通して、ご自身のすばらしさを証されることだからです。みなが牧師、執事といった指導的な役割に召されているわけではありません。でも、あなたには神様から与えられた役割（働き）があるのです。神のことばがますます広まって行くことのために、信仰と御霊と知恵に満たされることを祈り求めつつ、ともに主に仕えていこうではありませんか。